

# 沖縄本島北部の白太鼓

小林 公 江  
小林 幸 男

## はじめに

沖縄本島とその周囲の島々では、紺地の着物を着た集落の女性達<sup>1)</sup>が、小型の鉦留め太鼓あるいはパーランクーを手にした地謡とともに円陣を作り、地謡の歌と太鼓の響きにあわせて囃しをかけながら10数曲を次々に踊る白太鼓という芸能が伝承されている。白太鼓の呼称は地域によってウスデーク、ウシデーク、ウスンデーク、ウシンデーク、ウフデーク（八重瀬町安里<sup>やえせちやうあさと</sup>）、シニーグ舞（本部町具志堅<sup>もとぶちやうぐしけん</sup>）などと異なるが、ウシデークあるいはウスデークが一般的である。明治・大正期、あるいは第2次世界大戦直後に途絶した集落も多いが、今も十五夜や盆の頃、海神祭やシヌグなど地域により時期は異なるものの、およそ60ヶ所以上で挙行されている。

白太鼓歌は音楽的にも歌詞の面からも多様である。旋律は三線伴奏の古典音楽に多くの同系旋律を見出すことができ、今では古典音楽では歌われなくなった元歌の歌詞を伝承していることさえある。また歌詞は、琉歌の短歌（八・八・八・六の音数律によるもの）を中心に、対句型や詞型が判然としないものも含んだ様々な形がある。歌詞内容は王朝の賛美、村ほめ、娘の心情、伝承地域のことなど様々だが、最も多いのは恋の歌である。

白太鼓歌を歌詞進行という視点からみると、進行が緩やかで産み字が多く、歌詞1音に対して1～2拍、あるいはそれ以上の拍を要するもの、歌詞1音に1拍程度のもの、1拍に多くの歌詞（2～4）が入るもの、に大別することができる。このうち白太鼓歌の中核は歌詞の進行が緩やかなもので、長年の伝承

のうちに様々な歌を取り込み、音楽的に豊かになったと考えられる。

踊りは、拝む、手を押す、返す、手を叩くなどの素朴な動きが主流だが、沖縄本島北部では大きく手を振ったり、方向を頻繁に変えるなど、多様な要素が見られる。たいていの踊りは10拍前後の拍数で1パタンを形成し、歌の拍数とは関わりなくそれを繰り返すが、中には歌と一致するものもある。

本稿では、1973年～2013年までの調査に基づき、沖縄本島北部－国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村、本部町、伊江村、名護市、宜野座村、恩納村、金武町－、即ち「やんばる（山原）」と呼ばれる地域の白太鼓に焦点を当て、分布、白太鼓挙行の時期と付随する行事、同系旋律と歌詞、「ちらし」とテンポについて検討し、沖縄本島中部や南部とも比較しながら特徴を明らかにしていく。なお、沖縄諸島最北の離島の伊平屋島、伊是名島は国頭村にも近く、白太鼓の伝承もあるが、明治以前は行政区として沖縄本島の南部地域と同じ島尻方に属していたことから本稿では考察の対象とはしなかった。

## 1. 白太鼓の分布と伝承曲

### 1.1 分布

前述のように沖縄諸島に伝わる白太鼓の数は現行で約60だが、市町村史や字誌の記載事項や集落での口伝えなどを基に伝承地を探っていくと、かつて白太鼓を踊っていた集落はかなりの多い。北部地域でも、現在わかる範囲で表1のようにかなり多くの集落で白太鼓が途絶している。

これらの伝承地を地図にまとめたのが地図1である。地形が比較的平坦で集落が密集する南部地方とは異なり、北部地域は非常に山がちで海岸近くに集落が点在しているため数は少ない。

表1 白太鼓の伝承状況

市町村名	現行	途絶
国頭村	7	
大宜味村	2	2
今帰仁村		2
本部町 旧上本部	2	
本部町 旧本部	6	2
名護市 名護地区		1
名護市 羽地地区	1	1
名護市 屋部地区	2	
名護市 久志地区	4	3
東村		1
恩納村	5	1
宜野座村		3
金武町		2
計	29	18

全体の集落数がさほど多くはないので伝承地はまばらに見えるが、例えば国頭村では臼太鼓伝承地は、かつて小字であった集落を除いた16集落のうちの7集落であり、本部町の場合は1903（明治36）年に集落が整理統合された時の13集落のうちの10集落である。したがって現在のようにエイサーや村踊が行われていなかった明治以前の沖縄諸島では、臼太鼓が集落の中心となる最もポピュラーな芸能であったということができる。

地図 1



## 1.2 伝承地と伝承曲数

現在の北部一帯の臼太鼓伝承地と現在は歌われないものも含む伝承曲数は表2のとおりである。

表2 臼太鼓の伝承地と伝承曲数

市町村名	集落名と伝承曲数													集落数	総曲数	
	安波	16	安田	14	楚洲	14	奥	15	辺戸	11	与那	13	奥間			14
国頭村	安波	16	安田	14	楚洲	14	奥	15	辺戸	11	与那	13	奥間	14	7	97
大宜味村	屋嘉比	9	喜如嘉	15											2	24
本部町 旧上本部	具志堅	11	備瀬	13											2/8	24
本部町 旧本部	浜元	5	渡久地	5	伊野波	2	満名	4	辺名地	2	瀬底	3			6/8	21
名護市 羽地地区	我部祖河	2													1/7	2
名護市 屋部地区	安和	18	山入端	17											2/7	35
名護市 久志地区	嘉陽	8	汀間	9	瀬嵩	7	大浦	13							4/7	37
恩納村	名嘉真	12	恩納	4	谷茶	10	富着	6	仲泊	11					5	43
計															29	283

この他に、<sup>な き じん せん おやど まり</sup>今帰仁村親泊（現、<sup>いまど まり</sup>今泊に含まれる）、金武町伊芸、名護市久志など歌詞資料の残る地域の「曲名が類推できる曲」を含めると北部では約290曲ほどの伝承曲がある。各集落の伝承曲数は市町村平均で、国頭村13～14、大宜味村12、本部町<sup>かみもとぶ</sup>旧上本部12、旧本部<sup>もとぶ</sup>3～4、名護市<sup>やぶ</sup>屋部地区17～18、久志地区9、恩納村8である。本部町では旧上本部側と旧本部側で大きく曲数に差があるが、旧本部側が大きく減らしたからと思われる。減らした数はわからないが、瀬底では「曲、歌詞ともに多かったが、昭和40年代初め頃に右の3曲9節とした」[仲田 2003：49]と伝えられる<sup>2)</sup>。<sup>はまもと</sup>浜元の臼太鼓は1978年時点で「40年程前に」<sup>と</sup>渡久地から習ったといわれ、曲・歌詞ともに渡久地とほとんど同じである。渡久地の臼太鼓は、渡久地政一による1930（昭和5）年の5曲の採譜や「臼太鼓曲は5曲あって」[渡久地 1960：94]との記載から、当時も現行と同じ5曲であることがわかる。また、恩納村の場合、何れの集落でも伝承の中断があり、最も曲数の少ない恩納ではその期間がかなり長かったようである。

沖縄諸島の中南部でも臼太鼓の伝承には中断や復活があり、曲数が一様ではないが、国頭村のように曲数が多い地域、屋部地区のように曲数が多い集落はみられない。このことから旧本部を除く北部は、全体として一集落の伝承曲数が多いということが出来る。



## 2. 臼太鼓の挙行時期

臼太鼓がどのような行事と関わり、何時行われるのかは地域により異なる。北部の主な関連行事は盆、十五夜、シヌグ・海神祭だが、その他にも集落により様々な行事や日程とかかわっている。

沖縄の盆は旧暦7月13日（祖霊の迎え日）～15日（送り日）の家庭行事で、16日や17日頃に集落での「遊び」が行われることもある。臼太鼓は15日～20日前後に行われ、うるま市（石川・具志川・勝連・与那城の4地区）では、拝所や広場などで踊るだけでなく、招待を受けた家を巡回する。また、今は伝承が途絶えた旧佐敷村（現、南城市に含まれる）では「遊び」であるヌーパレーで臼太鼓が披露されたようである。明治以降、盆の芸能としてエイサーが集落に定着し、戦後になると青年会の女性達もエイサーに加わるようになったため、臼太鼓に若い女性の参加が見られなくなってきた。北部でこの時期に臼太鼓を行うのは現行では恩納村谷茶だけだが、『恩納村誌』によれば恩納村恩納もかつてはこの時期であった〔仲松 1980：582〕。谷茶は15日と18日に拝所で踊るが、青年男女のエイサーも同時進行で行われるため、若い女性の参加はない。

シヌグ・海神祭は旧暦7月の盆前や盆後の亥の日頃に行われる海の神、山の神に対する儀礼である。国頭村安波・安田（以上盆前）・楚洲・奥・辺戸（以上盆後）ではシヌグと海神祭が隔年で行われ、たいいてい臼太鼓で行事が締めくくられる。また国頭村与那、大宜味村屋嘉比（現、田嘉里に含まれる）では海神祭の翌日が臼太鼓で、かつては大宜味村喜如嘉や根路銘もこの時期に行っていたとみられる<sup>3)</sup>。国頭村西海岸側と大宜味村には女だけで行うエイサー（女エイサー）が伝承されており、国頭村ではこれを盆に、大宜味村饒波・大兼久・大宜味・根路銘では海神祭の翌日に行う。根路銘は古くは臼太鼓をしていたが、明治27、8年頃を境にエイサーを踊るようになったという〔宮城 1985:466〕。饒波・大兼久・大宜味では臼太鼓の伝承がないことから、女エイサーが海神祭の踊りとして定着しているが隔年で海神祭の翌日に村踊も行う。このように国頭村や大宜味村では非常に重要な儀礼と考えられていた海神祭やシヌグに臼太鼓を演

じて来たのであろう。なお屋嘉比では白太鼓の終盤に今は途絶した女エイサーの一部をちらしとして踊ることが、また国頭村与那では白太鼓後の余興として女エイサーを踊ることが恒例となっている。

本部町一带（辺名地・満名・伊野波・健堅<sup>4)</sup>・渡久地・浜元・浦崎<sup>5)</sup>・備瀬・具志堅）では白太鼓はシヌグの一環として行われ、具志堅では「シニグ舞」と呼ばれる。本部町のシヌグも地域の重要な行事と位置づけられているが、様々な行事で日数もかかるためか、村踊は八月十五夜頃に行く。

旧暦8月10日前後～15日頃に白太鼓を行うのは沖縄市や南部一带で、北部では名護市久志地区（嘉陽・汀間・瀬嵩・辺野古・久志）、恩納村名嘉真・富着などである。この時期には豊年祭の村踊を挙行する集落も多く、十五夜は白太鼓に限らず芸能の重要な時期の一つとなっている。但し久志地区では、白太鼓が十五夜頃であったためか、村踊は盆（七月）の芸能として定着している。

その他の時期は集落毎に異なっており、伝統的な日程は、名護市安和の旧暦9月16日、山入端の旧暦9月15日<sup>6)</sup>、恩納村仲泊の旧暦9月9日である。新たに定められた日程には、恩納村恩納の11月10日の恩納ナベ歌碑建立記念日、大宜味村喜如嘉の6月～7月に行われる喜如嘉まつりがある。

以上のことを踏まえて北部の白太鼓をみると、今では白太鼓、村踊、エイサーは対等な芸能であるが、白太鼓はエイサーや村踊より古くから行われているため、その挙行時期をもとに村踊りやエイサーの日程が定められたように思われる。例えば、国頭村与那では白太鼓は海神祭と関わっているので、女エイサーは盆に、十五夜には村踊と各芸能を異なる時期に行く。また、名護市嘉陽では白太鼓は十五夜、村踊は盆の行事である。一方、恩納村谷茶では盆に白太鼓を行っていたところに新たにエイサーが加わったが、担い手が異なっていたため両者を同時に行い続けてきたのであろう。

現在、シヌグや海神祭で白太鼓を行うのは本島北部や伊平屋島の田名に限られている。北部地域の北側ではこれらの行事が古くから重要視され、規模も非常に大きかったが、南側ではこうした行事がなかった（あるいはなくなった）

ため、盆や十五夜の挙行となったのであろう。これについては中南部の影響も考えられるので、臼太鼓の時期と関連行事については今後も検討が必要である。

### 3. 歌詞や同系旋律からみえる北部の特徴

各地の臼太鼓曲を旋律線や囃し詞とその位置、歌詞等から比較検討すると、数多くの同系旋律が見出せる。臼太鼓では大半の歌詞が琉歌の短歌であり、歌い替えが容易であるため、歌詞と旋律の結びつきが強い曲と弱い曲とがある。前者では《干瀬節》の「干瀬に居る鳥や 満潮恨みゆる 我身や暁ぬ 鳥どう<sup>ふいし</sup> 恨みゆる」<sup>ふいし</sup> 「真謝と真謝原や 通い欲さあむぬ 白瀬群松ぬ 下ぬ繁さぬよ」<sup>まじや まじやばる かゆ ぶ しらし ぶりまち しちや しぎ</sup> (恩納村名嘉真) やその類歌、《散山節》の「散山ぬ胡弓小 にしんとぬ胡弓小 胡<sup>さんやま さんやま くちよぐわ</sup> 弓小声聞ちよてい 驚かん肝や 按司が用んならぬ 吾用になゆる」<sup>ちよぐわくいち うどうる ちむ あじ ゆ わゆ す</sup> 「染みてい<sup>す</sup> 染みゆらば 浅染みやんばど 烏若羽ぬ 如に染みり」<sup>あさじ がらわかばに ぐとう す</sup> (国頭村安波) とその類歌のように、1, 2 節で特定の歌詞が歌われることが多い。この類の歌は囃し詞とその位置も共通であるため、歌詞しか残されていない場合も歌詞の連続性や囃し詞の記載から同系旋律の可能性を探ることができる。一方、歌詞と旋律の結びつきが弱い曲、例えば《下裳節》系では歌詞は各地で異なるので、曲名も各々異なることになる。また対句型の歌詞は旋律との結びつきが強いが、歌詞が琉歌と入れ替わることもあるのでそのあり方は様々である。

前述のように臼太鼓は途絶えた地域も多く、今では全貌をつかむことが難しい。特に南部に途絶地が多く、現在の曲の分布を単純に比較することには問題があるが、他に手がかりがないことから、現行の同系旋律の分布を通して北部の特徴を抽出し、次の検討への手がかりとしたい。そのため本節では主要な同系旋律曲を取り上げて歌詞や分布を検討する。

#### 3.1 臼太鼓の最初の曲と歌詞をめぐる

臼太鼓は地謡を先頭に、歌と太鼓に合わせて円陣を作るところから踊りが始まる。この円陣を作る歌あるいは円陣を作ってから1曲目の最初の歌詞とし

て歌われることが多いのが、王を賛美する「首里天加那志 百年迄千代迄 御  
万人ぬまぢり 拝でいしでいら」という歌詞である。この他に領主を讃える  
「石川から掛きてい 与儀比屋根迄や 美里ぬ御前加那志 うかき親島」(沖縄  
市知花)のような領地と領主に関わる歌詞、「〇〇が乗いみせる馬や 爪や綾爪  
に真黒かんぢゅ」という、「馬」を通して領主をを讃える歌詞がこれに続くこと  
もある。冒頭でこうした歌詞を歌うことは、白太鼓が王や領主のために行われ  
たことを表している。

このような歌詞で白太鼓が開始する例は、沖縄市やうるま市具志川地区・石  
川地区・与那城地区の一部、南部一帯、伊平屋島などで一般的である。しかし、  
北部では国頭村辺戸・与那・奥間、本部町各地、名護市大浦、恩納村谷茶・仲  
泊などで冒頭の曲に「首里天加那志」の歌詞を含むものの、この歌詞で始める  
のは辺戸、与那、奥間、備瀬、谷茶だけである。また、仲泊ではこのタイトルの  
歌は全11曲中の8曲目である。

ではどのような歌詞で白太鼓は始まるのだろうか。本部町と名護市屋部地区  
では「あさぎ庭ぬ芥 誰がさになすが 我達女童ぬ さになすさ」(本部町  
渡久地)やその類歌、名護市久志地区では「いかりかり童 ただいかり童 今  
日や名に立つる 十五夜でむぬ」(名護市嘉陽)やその類歌である。また国頭村  
の東海岸側ではシスグにかかわる歌詞や村ほめなどで、北部一帯では白太鼓を  
する娘自身のこと、村ほめ、シスグ行事など歌い手に身近な事柄を白太鼓の最  
初の歌詞とする例が非常に多いのである。

しかし「首里天加那志」から白太鼓を始める集落もあることや、『國頭郡志』  
記載の具志堅や途絶した今婦仁村親泊の歌詞の最初が「首里天加那志」である  
ことから、かつては北部一帯でも王や領主を讃える歌詞から開始されたのでは  
ないかと推測できる。何時の時代からか王を賛美する歌詞が欠落し、生活に密  
着した歌詞で白太鼓を始めるようになっていったのであろう。その理由につい  
ては同じ傾向が見られるうるま市勝連の例なども含めた今後の検討が必要だが、  
北部では白太鼓が領主など中央の役人を迎えて行うものではなく、十五夜やし

ヌグ・海神祭といった月拝みや海・山の神を迎えての集落の祭りとの関わりが深かったからではないだろうか。

臼太鼓の1曲目の旋律は現在までの検討では3系統に大別でき、北部にはそのうちの2系統がみられる。何れも琉歌一首でひとまとまりの旋律で、下句を反復する形式である。現時点で旋律の細かな系統や歌詞との関連について十分な検討ができていないので、ここではこの旋律の検討が沖縄諸島全域の臼太鼓を対象にして包括的行われることが必要であることを述べるにとどめたい。

## 3.2 曲の分布傾向

### 3.2.1 沖縄諸島全域に伝承する曲

#### 3.2.1.1 テンポがゆったりとした中核的な曲

《<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>節》……臼太鼓には2種類の旋律の《<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>節》があるが、ここでは臼太鼓で最も分布数が多く、古典音楽としても《<sup>く</sup>御<sup>じん</sup>前<sup>ふう</sup>風》とともに演奏される機会が多い《<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>節》を取り上げる。歌詞の1節目は「<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>岳<sup>だきぬ</sup>登<sup>ふ</sup>てい<sup>う</sup>し<sup>くだ</sup>下<sup>み</sup>い<sup>り</sup>見<sup>り</sup>ば<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>女<sup>みやらび</sup>童<sup>てい</sup>ぬ<sup>ふ</sup>手<sup>てい</sup>振<sup>い</sup>清<sup>づ</sup>らさ」で、2節目以降は「<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>」に関わる歌詞が多い。曲の位置は最初の方であることが多いので、重要な曲と捉えられる。

北部では国頭村各集落で伝承されているが、本部町での伝承はない。

《<sup>さん</sup>散<sup>やま</sup>山<sup>ま</sup>節》……古典音楽の代表的な曲で、臼太鼓曲としても分布数が多い。歌詞が「<sup>さん</sup>散<sup>やま</sup>山<sup>ま</sup>ぬ<sup>ま</sup>胡<sup>ま</sup>弓<sup>ま</sup>小<sup>ま</sup>〜」から始まるため「<sup>さん</sup>散<sup>やま</sup>山<sup>ま</sup>節」と呼ばれるようになったのであろうが、この歌詞は現在の古典音楽の《<sup>さん</sup>散<sup>やま</sup>山<sup>ま</sup>節》では歌われない。

北部にまとまった伝承はないが、各市町村に散見される。

《<sup>ふい</sup>干<sup>し</sup>瀬<sup>し</sup>節》……これも古典音楽の代表曲だが、《<sup>さん</sup>散<sup>やま</sup>山<sup>ま</sup>節》と同様に臼太鼓が元歌の歌詞を歌い継いでいる。現行では北部に伝承地が多く、特に国頭村と大宜味村の各集落で伝承されているが、中部や南部ではさほど伝承が多くない。

《<sup>びぬち</sup>辺野喜節》……伊集の木の花を歌い込んだ歌詞が元歌で、《<sup>いじゆき</sup>伊集ぬ木》とも呼ばれる。北部は伊集の花が多いためか伝承地も比較的多いが、南部ではあまり伝承されない。うるま市具志川地区、沖縄市にやや旋律の系統の異なる《伊集ぬ木》が伝承されているが、北部にはない。両者の関係については今後の検討が必要である。

この他、やや曲数は少ないが《<sup>しゆどん</sup>諸鈍節》《<sup>さかむどう</sup>坂本節》《<sup>なかんかり</sup>仲村渠節》《<sup>ちんにやーく</sup>沈仁屋久節》なども広範囲に分布している。

### 3.2.1.2 歌詞進行が1音に1拍が基本の曲

《<sup>んむふあ</sup>芋ぬ葉節》……古典音楽にも同系の旋律がある曲で、歌い出しの歌詞から《<sup>あ</sup>安里八幡》ともよばれる。北部に比較的多い。

《<sup>ひがしくま</sup>東細節》……「<sup>ひがしくまうどい</sup>東細踊～」と始まる歌詞が各地で共通する曲で、分布は広範囲だが、沖縄市やうるま市具志川地区・与那城地区には伝承がない。

### 3.2.2 伝承の中心が中南部の曲

《<sup>いしんみー</sup>石嶺節》……歌詞は対句型で、旋律と結びついた曲である。元は宮古島の曲だが、古典曲に含まれている。中部では極めて一般的な臼太鼓曲だが、北部では現在大浦のみで伝承される。汀間（現行曲ではない）や金武町屋嘉での伝承が確認できるので、南側から拡がり、久志地区あたりまで到達したものと考えられる。

《<sup>かちぬはな</sup>垣花節》……古典音楽に同系曲があり、中部や南部に数多く分布しているが北部では伝承されない。伊江島では旅くえーなのレパートリイでもある。

《くわでいーさ》……中部と久高島（南城市久高）で伝承が確認できるが、その他では伝承されない。

《那覇ぬちなち》……南部一帯には広く分布するが、南部以外で伝承がない。第1曲目とする集落も多く、糸満市与座では「那覇御前風」とも称されるが、歌詞の意味や詞型は不明確である。

### 3.2.3 中部と北部に伝承される曲

《永良部潟原》……旋律は古典音楽の《清屋節》や首里の《うりずんクエーナ》、奄美の八月踊歌《按司襲》と同系<sup>7)</sup>で、分布の広い曲である。歌詞は《清屋節》が琉歌、《うりずんクエーナ》が対句型、八月踊と臼太鼓には両方がみられる。臼太鼓の対句型は「永良部～」と始まるもので、北部では国頭村安波、大宜味村喜如嘉、恩納村谷茶に伝わる。また、安波や大宜味村屋嘉比、恩納村名嘉真の「一ち～十」迄の数の歌詞は沖縄では特徴的だが、奄美諸島でも歌われる歌詞である。中部では海側のうるま市与那城伊計や同勝連津堅に北部より長い対句型の歌詞がある他、同勝連平敷屋には奄美との関連を示す按司襲の歌詞もある。しかし沖縄市やうるま市石川東恩納など海からやや遠い地域では対句型の歌詞や奄美と関連がある琉歌はみられない。一方、恩納村仲泊では「思たんてさんくぬめ 連りていいかりゆみ～」<sup>8)</sup>という《按司襲》の囃し詞「シャンクルメエ」と関係が深い歌詞があるが、同時に東恩納などと同じ歌詞も歌われる。

このようなことから《永良部潟原》についてはさらに詳細に分布や歌詞内容と「奄美」「奄美的でないもの」をキーワードに検討する必要がある。

この他《金細工思なび》《下裳節》なども中部と北部の伝承曲である。

### 3.2.4 北部に伝承が集中している曲

《平敷節》……臼太鼓では、古典音楽とは異なり、伝承する地域の川や井戸と神人・娘・若者とを関連づけた歌詞に特徴があり、そのため各地で曲名が異なる。詞型は不定形で繰り返しも多い。本部町や名護市安和では川や井戸の水が土地の娘（若者）や神人などの浴びるよい水であると歌われるが、国頭村安田・奥・与那、大宜味村喜如嘉では川の水が流れその地の娘達が夜には自由に遊んだと



歌われ、意味がやや捉えにくい。与那では歌詞に屋嘉比・奥間・与那が歌い込まれているが、このように周辺の川と娘を歌った歌詞だけが続く歌は臼太鼓では極めて少なく、その伝承地が総て海神祭・シヌグの地域であることから興味深い曲の一つである。

《<sup>う ち ど り び</sup>宇地泊節》……同系旋律は古典音楽の同名曲で、臼太鼓では産み字などが多いゆったりした旋律である。国頭村のみ各集落で伝承しており、《恩納節》とともに重要な曲とされているが、他の地域には全く伝承がない。

《<sup>かしらちつく</sup>髻作い》……国頭村のみが伝承するが、同村奥間にはない。奥間は臼太鼓を1973年頃に復活しているので、過去にあったのかもしれない。また、安田曲の歌詞は他と共通だが旋律は異なる。

《<sup>うー</sup>いんちゃ苧》……「<sup>うー</sup>いんちゃ苧や<sup>う</sup>績みば <sup>わ</sup>我どう<sup>たみ</sup>ぬ為なゆる……」という歌詞の曲が恩納村を除く北部各地に分布するが、旋律は2種類あり、国頭村安波、名護市久志地区の大浦、本部町と、屋部地区安和、久志地区汀間とに分かれる。

《<sup>ていん ぶりおし</sup>天ぬ群星》……この曲は本部町では辺名地を除く全集落で伝承するが、他地域にはない。

《<sup>カナヘ</sup>ヨ一加那》……国頭村辺戸、大宜味村屋嘉比・喜如嘉、名護市安和・山入端、恩納村名嘉真、と比較的広い範囲に分布する。歌詞に共通性はないが、「<sup>き きや</sup>喜界や<sup>いちまざり</sup>五間切 <sup>うしまなまざり</sup>大島七間切 <sup>とくいら</sup>徳永良部<sup>ふゆんぬ</sup>与論 <sup>はな</sup>花ぬ<sup>うちな</sup>沖縄」(喜如嘉・屋嘉比)と沖繩以北の領地を歌い込んだ歌詞からみて、奄美との関連が考えられる。

《<sup>しちさく</sup>七尺節》……古典音楽にも同名の同系旋律がある。臼太鼓では国頭村奥、大宜味村喜如嘉、本部町具志堅・瀬底、名護市安和と伝承数は多くないものの、比

較的広範囲に分布している。

《ぎっ<sup>きこ</sup>そう》……同系旋律は奄美大島の八月踊の定番曲《でっしょ》である。国頭村安波、名護市久志地区の大浦・汀間・瀬嵩にあり、名護市山入端でもかつての伝承が確認できる。おそらく奄美側からの伝播曲であろう。

以上のように、臼太鼓では沖縄諸島全域に見られる曲と地域的な曲とがある。全域にみられる曲は北部でも数多く伝承されているが、中部や南部、北部各々に独特な曲がある地域的な曲は、中部や南部に比較すると北部にこの類の曲が多いことが一つの特徴となっている。中でも国頭村の《宇地泊節》《髻作い》、本部町の《天ぬ群星》など町村（間切）ごとの独特な共通曲は、臼太鼓では数少ない伝承地域を歌い込んだ《平敷節》系の曲とともに、臼太鼓の伝承や成り立ちを考えていく上で重要である。また、《ぎっそう》《ヨ一加那》《永良部潟原》などは奄美諸島と関連があるが、この「奄美との関連」は、海の交易という観点も含めた今後の検討課題ともなろう。

### 3.3 北部の臼太鼓のまとめ

前述のように各地の臼太鼓のレパートリイには、全域にまたがる曲や北部だけが伝承する曲、北部の中でも伝承地が限定的な曲など、様々なタイプがある。本項では各地のレパートリイを比較し、共通項を検討して以下の地域的なまとまりを抽出した。

地図2



①国頭村・大宜味村

国頭村では《干瀬節》《恩納節》《辺野喜節（伊集ぬ木）》《宇地泊節》が全集落にあり、やや数の欠ける《髻作い節》も含めた共通のレパートリィを想定できる。大宜味村は伝承地も少なく村単位ではまとめにくいが、《干瀬節》《下裳節》系、《平敷節》、数は少ないが《ヨ一加那》などが国頭村と共通であることから、全体としてひとまとまりの地域と捉えられる。

②本部町

本部町では具志堅と備瀬以外の曲目が少ないが、《しきじ節》系、《天ぬ群星》《いんちゃ苧》《平敷節》が共通することから、まとまった地域と捉えることができる。

③名護市久志地区

《いかりかり（しきじ節系）》《恩納節（白浜節、金武節とも）》《東細節》《ハリさんじゃく》《ぎっそう》《今日ぬ誇らさ》などの共通レパートリィでまとめ

られる地域である。

④本部町と名護市屋部地区・久志地区

《しきじ節》と《いかりかり》は歌詞は異なるものの同系旋律で、何れもこの曲で臼太鼓を開始することからもこの3地域にはまとまりがありそうである。しかし、本部町の旧本部は曲数が少ないため、共通項が見出しにくい。その中では旋律が2種類ある《いんちゃ苧》が、一つは本部町の各字と大浦、もう一つは屋部地区と汀間というやや入り組んだ共通性を示している。

屋部地区と本部町では《平識節》《七尺節》《金細工》《打ち豆<sup>うまみ</sup>》に共通性が見出せる。また、屋部地区と久志地区では《散山節》《恩納節》《干瀬節》《安里八幡》《東細節》という中核的な曲を含む組み合わせや《ぎっそう》を通しての共通性が想定できる。

⑤名護市屋部地区と恩納村名嘉真

《散山節》《干瀬節》《安里八幡》《永良部潟原》《ヨ一加那》《そんが節》というかなり多くの共通曲があるので両者には関連がありそうである。恩納村名嘉真は恩納村の他集落と距離が離れているだけでなく、字恩納とともに古くは金武間切に属してことから方言が谷茶以南と異なっていたためか、恩納村の他集落との共通項が少ない。

⑥恩納村恩納・谷茶・富着

恩納と谷茶以南は前述のように言葉が異なるが、この3集落は距離も近いためひとまとまりとして捉えてみた。何れの集落も伝承が中断した時期があり、特に恩納と富着は曲数も少ないので、共通な曲は《でいーゆしら》だけである。他には《浮ちょーる》(谷茶・富着)、《恩納節》(恩納・谷茶)なども共通項の可能性はある。

⑦恩納村仲泊とうるま市石川地区(石川・東恩納・伊波・山城)

仲泊は恩納村の他集落とはほとんど共通曲がないが、うるま市石川地区側には《首里天加那志》《東細節》《大島》《永良部潟原》などの共通曲があり、特に字石川とはレパートリィが類似している。その一つ《永良部潟原》が石川地区

側だけでなく恩納村側（谷茶）にもあるが、仲泊の歌詞は字石川や東恩納と同内容の琉歌であり、対句型の谷茶とは全く異なっているので、ここからも石川地区側とのつながりがわかる。

## 4. 「ちらし」とテンポをめぐる

### 4.1 「ちらし」とレパートリーの多様性

国頭村の東海岸側（安波・安田・楚洲）や名護市久志地区の汀間・大浦などでは臼太鼓の終盤に「ちらし」という部分がある。「ちらし」の曲は歌詞の進行が速く、全体に軽快である。また楚洲、安田、大浦の「ちらし」には、地謡が踊らず、非常に速いテンポで太鼓を叩きながら歌う曲も含まれているが、これは女エイサーの速いテンポの曲と同じものである。一方、西海岸側で「ちらし」という呼び方をするのは大宜味村屋嘉比だけで、ここでは衰退した女エイサーの一部の曲を臼太鼓の「ちらし」として歌い踊っている。このように「ちらし」はゆったりとした臼太鼓とは少し性格が異なる曲で、長い伝承の中で次第に臼太鼓に取り込まれていった曲のようである。

同様な性格の曲は恩納村名嘉真（《汀間とう》《宮古に一》《舟ぬこんこん》）や名護市安和・山入端（《そんが節》《みちきぎゃ》《伊計離》）にもあり、何れも終盤で歌い踊られるが、両集落には「ちらし」という呼称がないため、特に他の曲とは区別されていない。このように「ちらし」という区別がある集落とない集落があるが、区別がない場合もちらし的な曲がレパートリーに含まれないわけではないので、曲のテンポや性格は注意してみていかなければならない。

この点では、中部のうるま市与那城地区一帯で円陣の臼太鼓終了後に縦列になって踊られる「踊り節」も注目すべきものである。「踊り節」は音楽的には軽快で女エイサーとも共通する曲も含んでいるが、ややゆったりした曲もあり、「ちらし」と同様、性格の異なるものが新たに臼太鼓に取り入れられたということがよくわかる一群の曲である。「ちらし」との相違点は、「踊り節」が扇や四ツ竹等を用いた華やかな縦列の踊りとして構成され、テンポの緩急に拘わらず地

謡が円陣の臼太鼓のように踊りながら歌うことがないことである。

「ちらし」やちらしに対応する曲は何れも円陣の臼太鼓であるため、「ちらし」と呼ばない地域では元々の臼太鼓と区別がつきにくい。しかし、各地の臼太鼓をみていくと、前述の名嘉真や安和に限らず、国頭村奥間《<sup>とらちやま</sup>虎頭山》《<sup>やま</sup>ハリ山節》、与那《ムチクシ節》、奥《<sup>みぐ</sup>だんく節》《<sup>めぐ</sup>巡り節》、辺戸《<sup>カナー</sup>加那ヨ一節》、大宜味村喜如嘉《<sup>あがりざとう</sup>東里》などにちらし様の曲を見出すことができる。

このように北部に「ちらし」様の曲が多いことは、この地域の臼太鼓の幅広く多様な音楽性につながると同時に、各伝承地の曲数の多さにも結びついている。例えば名護市安和では18曲、国頭村安波では16曲が伝承されており、そこには軽快な曲も多数含まれているのである。これらの曲がいつ頃臼太鼓の曲になったのかは今後の検討課題だが、前述の急速なテンポの曲に限っていえば女エイサーとの共通性が高いので、臼太鼓化は女エイサーが成立した明治時代のことであり、臼太鼓としては比較的新しい変化であると考えられる。

#### 4.2 テンポの問題について

臼太鼓では、歌詞の進行が遅くゆったりとした中核的な曲は前述のちらし的な曲に比べると一般にテンポが遅いが、その度合いは地域によって様々に異なっており、北部の場合、大きく次の4段階に分けることができる。

① J = 50~66

楚洲と安波を除く国頭村の各集落、大宜味村屋嘉比、本部町浜元・満名・具志堅

② J = 40~50

国頭村安波、大宜味村喜如嘉、本部町渡久地・備瀬、恩納村名嘉真

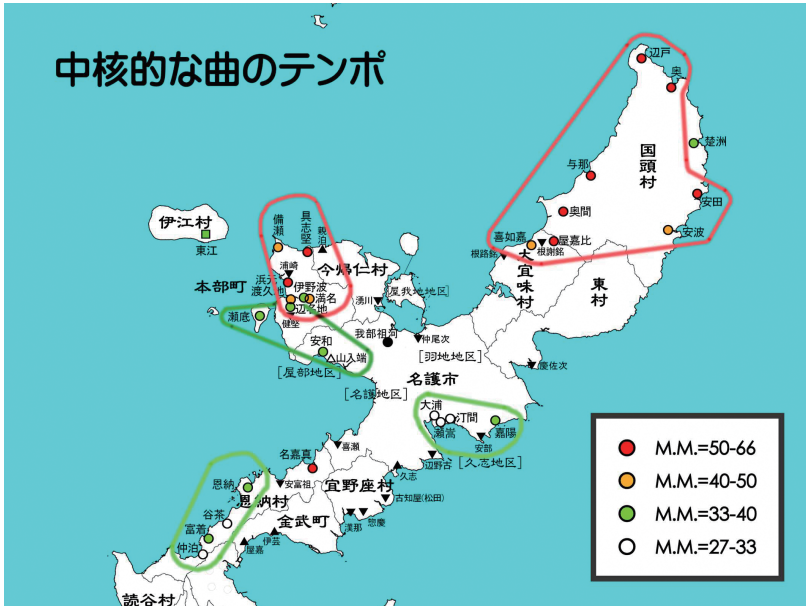
③ J = 33~40

国頭村楚洲、本部町伊野波・辺名地・瀬底、名護市安和・嘉陽、恩納村恩納・富着

④ ↓ = 27~33

名護市山入端・大浦・瀬高・汀間、恩納村谷茶・仲泊  
これを示したのが地図3である。

地図3



これらのテンポを他地域と比較すると、遅いテンポでは、例えばうるま市の勝連南風原や与那城屋慶名等の ↓ = 17, 18 というかなり遅いテンポもあり、速いテンポでは、沖縄市胡屋の《東江節》( ↓ = 63)、沖縄市上地の《坂本節》( ↓ = 54) のように類似した例もある。したがって北部のテンポはほぼ沖縄全域の臼太鼓のテンポの枠に収まっているということが出来る。しかし、その分布に焦点を当てると、北部の北側に①の速めのテンポの伝承が多く、南側にいくにしたがってテンポが遅くなっていることがわかる。勝連半島や沖縄市など中部地域ではゆったりとしたテンポが多いので、南側のテンポはその影響であり、



北部にはその影響が少ないと捉えることができるが、北部は海を隔てた奄美文化圏のテンポの速い八月踊と関連を持っていたとも考えられる。

次に、中核的な曲だけでなくちらし等も加え、全体のテンポのありかたについてみていこう。例1のように恩納村仲泊や上本部の具志堅・備瀬は、基本となるテンポに違いはあるが全曲がほぼ同じテンポである。一方例2の国頭村安波・安田、名護市安和・大浦などではテンポが変化し、次第に速くなるという傾向がある。

例1 変化が少ない例

仲泊 (♩ = 30~33)      備瀬 (♩ = 42~44)      具志堅 (♩ = 54~56)

例2 変化がある例

大浦 ♩ = 27~30 → 引羽 ♩ = 56 → ちらし ♩ = 42~48 → ♩ = 168

安波 ♩ = 42~48 → ♩ = 50~54

安田 ♩ = 52 → ♩ = 63 → ♩ = 168

安和 ♩ = 33~36 → ♩ = 58 → ♩ = 68 → 引羽 ♩ = 38

国頭村安波では「ちらし」になると全体にテンポは速くなる。同村安田も「ちらし」の1曲目でテンポが速くなり踊りが軽快になると次の曲からは地謡が踊りの輪から外れ、歌うだけになってさらにテンポは速まる。同村楚洲でも同様の展開である。名護市大浦では少しテンポが速く軽快な曲で円陣を解くが、再び円陣になって「ちらし」を始める。「ちらし」は更にテンポが速く、特に終曲では安田同様、地謡が踊らずに急速なテンポの曲で円陣を解く。

名護市安和では「ちらし」という区別はないが、産み字などが多く歌詞の進行がゆったりとした曲に「ユイ」という囃し詞が入り、それが入らない曲は歌詞の進行が速くテンポも軽快で、「ちらし」に相当するとみなしうる。ゆったりとした曲が前半、軽快な曲が後半で、最後にテンポがゆったりとした引羽で終了

する。ただし、かつてはテンポの速い《伊計離》があったという。このように終盤でテンポが速くなる展開は名護市大浦や国頭村安田などと同様である。

以上のように、「ちらし」あるいはそれに類する曲が臼太鼓のレパートリイに含まれている地域は、レパートリイのみならず、テンポも多様なのである。

## 5. 踊りについて

踊りについてはまだ北部以外では検討が進んでいないため、ここでは踊りの持ち物と所作について簡単に述べておく。

臼太鼓の踊りで用いられるものは扇、四ツ竹などで、中南部ではほとんどの伝承地で扇踊や四ツ竹踊がみられる。これに対して北部では手踊りだけを伝承する地域が多く、これには全く何も持たない集落と手拭いを指の間に挟んで踊る集落とがある。後者は手拭いがひらひらするので見た目に華やかさがあるが、踊り自体は全くの素手と変わらない。恩納村では手踊りだけを伝承する集落はなく、四ツ竹踊（名嘉真・恩納・谷茶・富着）、扇踊（恩納・谷茶）、采踊（恩納）がみられる。名護市嘉陽にも扇踊と四ツ竹踊があるが、曲数は少ない。また、本部町備瀬には1曲だけ銭引（じんびき 銭太鼓）を持つ踊りがある。これ以外の北部の集落は総て手踊りである。このうち大宜味村屋嘉比、国頭村与那では手拭いを指に挟み、国頭村奥間や安田も終盤の踊りに手拭いを用いるが、これらは手拭いが一般的な女エイサーの影響なのであろう。

このように、北部では扇や四ツ竹の踊りは南側の恩納村や久志村の一部だけにみられ、北側は手踊りだけを伝承している。おそらく中・南部で行われていた扇や四ツ竹の踊りは南側の恩納村の臼太鼓には早くから影響を与えたが、その影響は北側まで届かなかったのであろう。本部半島一帯の男女の手踊りエイサーや北側西岸の女エイサーでも、前者では名護市が扇や四ツ竹を用いるが本部町や今帰仁村では手踊りであり、後者では大宜味村側に扇や四ツ竹を用いる集落もあるが国頭村では手踊りだけという特徴があるが、それと類似する現象であらう。

次に踊りの所作についてみていくと、白太鼓の踊りは大半が歌と関わりなく10拍前後のパタンを繰り返していくもので、踊りは拝む、手を押す、返す、手を叩くなどの素朴な動きが主流である。これは北部も同様だが、その他に北部では大きく手を振る、方向を頻繁に変える、手先を動かすだけでなく身体全体を大きく動かす（前傾するなど）など、曲によっては多様な動きが含まれている。一般に沖縄の踊りでは手先の柔らかさや柔らかく手首をまわす動きが特徴的だが、北部では必ずしもそれを強調せず、むしろ逆にそのようにしないようにと教えられることもあって、「ぶっきらぼう」とでも言えそうな動きさえある。また前述のように女エイサーの影響もみられ、パタンの踊りではなく歌と踊りの拍が一致するものもみられる。テンポの速い地域、または速いテンポの曲では踊りも躍動的でダイナミックである。この傾向は北部の北側に多くみられ、特に国頭村で顕著である。

## 6. まとめ

これまで各項目で述べてきたことを整理すると、北部の白太鼓の特徴としては以下のことが挙げられる。

- ①一集落の伝承曲数が中部や南部に比べて多い。
- ②挙行の時期と付随行事については、海神祭・シヌグとかかわって白太鼓や諸芸能（女エイサー・村踊）を行う地域が北側の国頭・大宜味村や本部町にあり、それが中部や南部とは大きく異なる特徴となっている。恩納村や名護市久志地区など南側では中部や南部同様に盆や十五夜に白太鼓を踊るが、これが本来的なものなのか南側からの影響であるのかは今後の検討が必要であろう。
- ③中部や南部に比べると冒頭で「首里天加那志」を歌う集落が少なく、多くの集落で行事や村ほめなどが歌われる。また地域独特の曲数が多く、中でも白太鼓には数少ない当該地域を歌い込んだ歌詞のみで構成される《平敷節》系の曲は興味深い。
- ④沖縄諸島各地の白太鼓曲のテンポは4段階に分けられるが、北部には早いテ

ンポの伝承地が多く、特に北側に顕著である。また、一集落のレパートリーにテンポの異なる曲が含まれており、次第に早くなって終わるという傾向がこちらで見られる。

途絶した臼太鼓だけでなく、現在伝承されている臼太鼓の多くも中断を繰り返した歴史があり、失われたものが多いことはいうまでもない。しかし、現時点でも以上のように北部地域の臼太鼓に様々な特徴がみられ、特に北側にその特徴が多いことが明らかとなった。この背景には、踊りの持ち物なども含め、北側が比較的古い要素を残しており南にいくほどおそらく中部や南部の影響を受けて変化していったということがある。

しかし同時に、北側はかつて陸路が非常に不便であったことから船での交易を中心に暮らしを成り立たせており、与論や沖永良部は言うに及ばず奄美大島をはじめとする奄美の島々とのつながりが深く、その影響を受けていたとも考えられる。こうした観点から今後は中部・北部で伝承され、奄美との関連が深い歌詞も含む《永良部潟原》や八月踊に旋律同系曲がある《ぎっそう》などをはじめとして、与論、永良部、大島、諸鈍など奄美諸島の地名を含む歌詞を軸に、旋律や分布を検討していくことも必要であると思われる。

また、《平敷節》系のように伝承地域に関わる歌詞だけで構成された曲は臼太鼓では数が少なく、他には《真喜屋ぬ大あさぎ》(具志堅)、《くびる並松》(備瀬)などがあるだけだが、いずれも地名に関わる川やあさぎが順に次々と歌われている素朴な表現の歌である。こうした歌は《永良部潟原》のような対句型の歌詞の歌<sup>9)</sup>と同じように、音楽的には1音1拍程度が基本となる比較的歌いやすい曲で、古くから歌い継がれていた可能性がある。おそらく臼太鼓は沖縄諸島全域に分布するタイプのゆったりとした曲群を中核として拡がり、各地で他の曲を吸収して現在のような芸能になったと思われるが、このような古さを残す歌と中核的な曲のありようを細かく見ていくことも必要であろう。

## おわりに

現在、北部地域の多くの集落では高齢化や過疎化が進んでおり、豊かな芸能の伝承に様々な問題が生じている。中でも臼太鼓は女性だけの芸能であることや、歌がゆったりとして産み字などが多く覚えにくいいためなかなか伝承がスムーズに行えないこと、踊りが単純であるが故に多くの人が先輩に頼ってしまい、頼り手が引退した途端に踊れなくなる等、さまざまな課題を抱えてまさに伝承の危機に瀕している。住人が減りつつある集落でこうしたことを克服するのは大変なことではあるが、先人が築いてきた豊かな芸能と同じ質の芸能を新たに生み出すことも至難の業である。

こうした問題は全国的に生じており、様々な試みが行われていることから、この地域でも各集落で種々の対策——例えば男性のバックアップ、子どもたちの参加、この芸能がない近隣の他集落の加勢など——を検討し、芸能が伝承されていくことを期待したい。筆者も楽譜や歌詞をまとめていくという作業や練習に立ち会うことなどで協力をしていきたいと思う。

## 註

1. 例えば、若い娘が白の胴衣・下裳、地謡が「うわーほーい」という着物の上にもう一枚着物を羽織る服装や、頭に白やピンク、紫などの鉢巻きを結ぶ、白や紫の長い巾などを結ぶなど、集落毎に衣裳には細かな違いがある。それは年齢や時代、行事の日程などによっても異なるが、現在、多くの集落で見られる婦人層や老人層の衣裳は紺地の着物である。
2. 『本部町史』には「以前は相当数の歌があったが1958年頃に今の三曲にまとめたという」[本部町史編集委員会 1994: 244]と書かれており、やや異なる時期が記載されている。
3. 『山原の土俗』には「大宜味村の海神祭の翌日は同村喜如嘉の氏子は臼太鼓、字城はエイサー（盆踊り）、字屋嘉比は村芝居を各催したようである」[鳥袋 1976: 315]と記されており、今も大宜味村では海神祭の翌日が踊りの日となっている。しかし、喜如嘉臼太鼓は廃藩置県頃には衰退しており、その後の復活（明治21年復活～衰退～大正12年頃復活～昭和3年の戦前最後の挙行～1951年頃の復活）では、小学校の記念行事などで踊られただけなので、鳥袋がどの時代のことを述べているのか不明である。城の女エイサー開始は明治時代、男女のエイサー開始は大正時代、屋嘉比の村踊は明治41年頃に再開 [安

里 1990 : 118] であるため、大正時代のことと推測できるが、この時代に喜如嘉はほとんど臼太鼓をしていないので、喜如嘉の記述は明治以前の聞き書きであろうか。

4. 健堅は1960年代まで臼太鼓を行っていたが、その後途絶したため現在では臼太鼓に替えてエイサーを行っている。
5. 浦崎は、「戦後しばらくは臼太鼓をやっていた」[本部町文化財保存調査委員会 2001 : 101] が、今では途絶している。
6. 山入端では臼太鼓の踊りと歌の伝承は既に途絶えているため、9月15日の「ウスデーク御願」では臼太鼓の録音テープが流されるところである。
7. 《永良部潟原》の分布や比較検討については拙著「永良部潟原－旋律と歌詞の比較研究」を参照されたい。
8. 類歌は宇検村の八月踊歌にみられる。うるま市石川の石川では「さんくるめ」と歌われているが、八月踊の囃し詞は「シャンクルメ」「サンキョロメ」「シャンクルマ」などで、これは先田によれば「藩政時代においては航海中の儀式であった」[先田 2007:19] という。
9. ここでは宮古諸島や八重山諸島発祥で古典音楽に取り入れられた、例えば《石嶺節》のような対句型の歌は対象としない。

#### 引用・参考文献

- 安里有三 1990『田嘉里の歴史』 安里有三
- 国頭郡教育委員会 1967『沖縄縣国頭郡志』 沖縄出版会（初版 1919年）
- 久万田晋 2012『沖縄の民俗芸能論 神祭り、臼太鼓からエイサーまで』 ボーダーインク
- 小林公江 1978「沖縄県北部のウシデーク－国頭村・大宜味村・旧久志村における歌と踊りの比較研究－」東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文
- 1982「本部町のウシデーク－国頭村・大宜味村・旧久志村との比較を中心として－」『南日本文化』14号 鹿児島短期大学南日本文化研究所
- 1988「恩納村名嘉真の臼太鼓歌」『大阪女子短期大学紀要』13号  
大阪女子短期大学学術研究会
- 1989「永良部潟原－旋律と歌詞の比較研究」『関西楽理研究』Ⅵ 関西楽理研究会
- 1990「名護市安和の臼太鼓歌」『大阪女子短期大学紀要』15号  
大阪女子短期大学学術研究会
- 1990「石川市の臼太鼓」『関西楽理研究』Ⅶ 関西楽理研究会
- 1991「具志川市具志川・田場の臼太鼓歌」『大阪女子短期大学紀要』16号  
大阪女子短期大学学術研究会
- 1993「臼太鼓における〈散山節〉」『関西楽理研究』Ⅹ 関西楽理研究会
- 1994「沖縄の臼太鼓曲の旋律構造」『日本の音の文化』第一書房
- 1997「沖縄の臼太鼓とエイサー－同系旋律曲をめぐって－」『民俗音楽研究』

第19号 日本民俗音楽学会

先田光演 2007「八月踊り 按司添とシャンクルメ」『民間芸学』第7号

奄美沖縄民間芸学会

島袋源七 1929『山原の土俗』郷土研究社

(1976『日本民俗誌体系』第1巻 角川書店 収録)

渡久地政一 1960「沖縄本部町字渡久地に伝わる臼太鼓の記録」

『琉球大学教育学部研究集録第4集』

仲田善明 2003『本部のシヌグ』沖縄学研究所

仲松弥秀編著 1980『恩納村史』恩納村役場

名護市編さん委員会名護市史『言語』編専門部会編 2006『名護市史本編10 言語』名護市役所

日本放送協会編 1991『日本民謡大観(奄美・沖縄) 沖縄諸島篇』日本放送出版協会

外間守善、比嘉実、仲程昌徳 1979『南島歌謡集成 V 奄美篇』角川書店

1980『南島歌謡集成 II 沖縄篇下』角川書店

宮城倉栄編 1985『根路銘誌』大城栄進

本部町文化財保存調査委員会 2001『本部町の文化財 第十集 本部のシヌグ』本部町教育委員会

本部町史編集委員会編 1994『本部町史 下』本部町

渡邊欣雄 1987『沖縄の祭礼』第一書房

〈キーワード〉

臼太鼓 同系旋律 ちらし シヌグ・海神祭 分布